旧満洲国の思い出

――ソ満国境 ハンダガイの記憶

伊佐　二久　陸士55

今の若い方々は、中国特に旧満洲に行かれることはほとんどないと思うが、大東亜戦争以前日本の若い青年は狭い日本では生活できないと思い、広い満洲で農業などに従事する人たちが多かった。

私が予科士官学校を卒業して隊付を命じられた時、部隊は北海道旭川の歩兵第26聯隊であったが、当時部隊は北満洲のソ満国境守備にあたっており、私たち士官候補生9名（階級は伍長）もハンダガイ勤務を命じられた。

東京から下関まで国鉄経由、下関から連絡船に乗って朝鮮釜山にわたり、あとは南満洲鉄道で寝台車にも乗らずチチハルに到着。ここで聯隊長の宮崎周一大佐に申告し、トラックに乗ってハンダガイに到着したが、日本の市街に比べて広い街路に驚いたものである。

当時の歩兵第26聯隊はノモンハン事件（1939年5月～9月）の直後で、現役の将校、下士官、兵士はほとんど戦死し、年配の召集兵が多かった。

ハンダガイはソ満国境に接した崖の上にあり、真下にハルハ河が流れていて、ソビエト兵の姿も見えていた。時には軍隊を脱走して満洲に渡ったソビエトの兵隊もいたようである。

途中ハルビンにも立寄ったが、ここはソビエトから逃れた白系ロシア人が多く、町も西欧風で外国に行ったような気持であった。

ハンダガイでは私ら士官候補生の兵舎はなく、岩山を掘りこんだ洞窟の中で生活していた。冬は零下50度になり、ストーブで薪などを燃やしていたが、それでも窓際に置いた水は凍っていた。

私たちはまだ10代の子供だったので極寒の中でもなんとか生活していたが、このような体験はじ後、一生味わうことはなかった。

現地は全くの僻地でトイレもなく野外で排尿していたが、排尿した途端に尿が凍ってしまった。

厚いマスクや防寒帽、耳カバーをつけないと、耳や鼻が凍傷になって苦しむ兵隊も少なくなかった。毎日雪が積もって、天気がいいと太陽の反射光線で網膜炎になる人もあり、全員色眼鏡をつけて眼を保護していた。夜は狼の遠吠えが聞こえていて、満洲の中でも無人の僻地という感じを抱いたものである。

満洲国は五族協和という理想で宣伝されたが、実際に体験してみると、私には日本の植民地といった感じがした。満洲国政府はあっても、日本の関東軍や官僚の支配下にあり、かつて松花江で外輪船に乗った時も、中年の船長より20代の若い日本人事務長の方が威張りくさっているのに驚いたことがあった。

今思うと日本は狭いから朝鮮、台湾以外にも植民地が必要だが、国際的な了解を得るため五族協和という理想を掲げたと思っている。

日本は敗戦で朝鮮、台湾、委任統治地などすべてを失ったが、単民族になってかえって経済大国として発展したことを思うと、国家は単民族がトラブルもなく理想であると思っている。